

5 海外親善派遣団団長・団員の思い出

原健三郎先生と出会って…

(茨城県)
第3回(昭和47年度) 団長 沼田匡史
第9回(昭和53年度)

原健三郎先生との出会いは、先生が昭和47年2回目の労働大臣をされているときでした。当時山口先生が年少労働課長をされており、私の住む古河市にも昭和41年勤労青少年ホームが開設され、私は、一職員として労働省においての青少年ホーム職員研修会に参加しました。山口先生の勤労青少年福祉法の講義の後に質問をすると、時間の関係もあったのか「君、あとで詳しく説明をするから残ってくれ」とのことでした。地下の食堂でカレーライスをご馳走になり、山口先生に連れられて大臣室に伺いました。「大きな体の方」というのが原先生の第一印象でした。後日分かったことですが、体だけではなく「心」も大きく周りにいる方を包み込むような先生でした。

山口先生は私のことを「大臣、面白い男を捕まえて来ました。この男、我々の作った勤労青少年福祉法について面白いことを言いますので聞いてください」と言われたので、私は現場にいる職員の立場から若者の考え方や行動等いろいろと話をさせていただきました。話をしているうちに先生は古河を知っていて、近くの新古河に釣りに行ったこと、知人も居る等気軽に話をされました。私は大臣と話をするなど思いもよらなかったため、天にも昇るような気持ちでした。帰り際に時々遊びに来るようにとの先生の言葉に甘え、議員会館にお伺いしたり、ご自宅に泊めていただくのも度々でした。

先生は大臣就任中に、今後の日本のため

「勤労青少年の労働外交」の必要性を提唱され、毎年全国の勤労青少年ホームより30名の代表を選び「勤労青少年海外派遣使節団」として、若者に勉強する機会を与えて下さいました。その結果は素晴らしいもので、団員たちは各地域において若者のリーダーとして活躍。40年を経た今はトップリーダーとして地域社会を支えています。正に先生の提唱された「労働外交」の結実です。私も第3回アメリカ、カナダ、メキシコ、第9回ヨーロッパ5箇国の派遣団長として参加させていただきましたことは、私の人生の大きな宝となりました。そして、私の労働大臣賞受賞の祝賀の会に奥様御同伴でご臨席頂きましたこと等、先生の思い出は書き尽くせません。永きに渡りご指導いただいた先生、奥様をお見送りした今は、原哲明会長の下、協会の基礎となった先生のご意思を次の時代に伝えて行くお手伝いが出来ればと思っています。



交歓全国大会にて

前会長 原健三郎先生の思い出

第10回（昭和54年度）（千葉県）

第19回（平成元年度） 団長 播磨昭二

第23回（平成6年度）

原先生の思い出は、いろいろありますが、先生のざっくばらんでズケズケおっしゃるところが東京の下町育ちの私にとっては好きでした。先生が労働大臣を2度お務めになられたところは、労働省で下っ端の私には雲の上の人で、お言葉をいただいたことはありませんでした。私が1979年に当協会の第10回海外親善派遣団の団長に選ばれたころから親しくお話を聴く機会が増えたのです。

'79年11月、私が、労働省主催の勤労青少年ホーム指導員の研修担当責任者として、東京代々木のオリンピック記念青少年センターに泊まり込みで仕事をしていたところ、役所の上司から急用があるから職場に帰ってくれと言われました。何事かと役所へ行きましたら、「海外親善派遣団の団長に予定されていた人が行かなくなったので、そのピンチヒッターになってくれ」ということでした。私は、アメリカの日本本土への空爆で家は消失するし、非戦闘員の逃げ惑う私に対してグラマン戦闘機から機銃掃射をしたり、B29爆撃機が投下した爆弾が私の近くに落ちたため、その爆風で吹き飛ばされ川に落ちたり、悪い思い出ばかりで、アメリカは、大嫌いだからいやだと断りました。上司は、「元大臣から派遣団は、1週間後に出発するので何とか頼む。と言われているので断るわけにはいかない。」しかも、団長の面接をされると言われるのです。私は、団長がいなくて困っているのに面接までするというのは筋が通らない。な

どと理屈を言いましたが、結局引き受けることになりました。

先生と長時間お話しできたのは、過去3回の派遣団帰国解団式の後、先生と団長・数人の選ばれた団員との座談会でした。先生の戦前に経験された数年にわたる海外生活と戦後我々のわずか2週間の海外旅行とは、その質量が比較にはなりませんでしたが、我々の帰国報告を親しく聴いていただいたことを忘れることはありません。

また、先生が衆議院議長をされていたころ、東京中野区の全国勤労青少年会館（サンプラザ）にお見えになりました。私が、当時サンプラザの7階にあった（社）日本ワーキングホリデー協会の専務理事をしていたため、先生が「播磨君の事務所へ寄る。」とおっしゃって護衛のSPや地元の警察官数人とともに狭い事務所にお見えになったことなど忘れ得ぬ思い出です。（完）



親善派遣団帰国後の報告座談会

継続こそ力

第15回（昭和60年度）団長
第7回（昭和51年度）副団長

（兵庫県）
船越敏郎

原健三郎会長が勤労青少年の健全育成と視野を世界に開くため本財団を設立したのは、先生が労働大臣だった昭和44年（1969年）で、このたび40周年を迎えた。

会長は常々「継続は力なり」と力説されていたが、これほど長期にわたって活動を続けている会は極めて少ない。

心からお祝いを申しあげたい。

私自身、第7回（昭・51）の副団長、第15回（昭・60）の団長として、過去2回お世話になっており、各々30名を引率させていただいた。

既に、700余名の体験派遣団員は、豊かな国際感覚を体得して、地域社会あるいは職域で主導的立場で陣頭に立っている。

特に、昭和60年派遣時、姉妹都市提携締結（ホーム・ステイのセントメリーズ市）の使者との関係もあって、爾来、交歓留学生の往来、交流も盛んで喜ばしい。

それを機に、セライナ市、バンワート市（いずれもオハイオ州）と引続き姉妹都市提携が結べたのも、地元ではすべて私の成果となっているのは面映ゆい。

真実は私の親友、ケンプ博士（国際交流協会会長）や、セル市長（セントメリーズ市）の涙ぐましいご奔走、ご尽力によるものだ。

35回を数える毎年恒例の海外派遣団全国大会も待遠しく、特筆すべきは40周年を機に、わが派遣団員が淡路島に集い、更に旧交を温めあった。

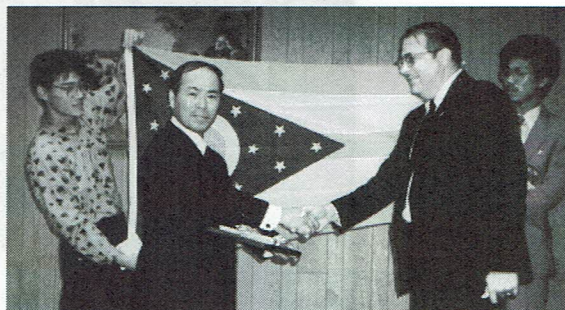
すべて独身だった団員が、今や定年を前に

経営者、地域の重鎮、良妻賢母、一家の大黒柱と化し、その成長ぶりに眼を見張った。

本財団は近年、国際交流事業（海外派遣）のうえに、フィランソロピー（社会貢献活動）、次世代育成支援事業、若者向け講演会などにシフトして、内面的人格形成、ステップアップに寄与し、必ずや成功を収めるものと確信している。

それぞれの時代背景に立脚して、当初は国際交流、ミニ労働外交などで国際感覚の会得と親善を深め、海外でのホームステイ、ボランティア、語学研修など様々な生活体験へと拡大し、近年、次世代育成に的を絞って内面的成長をめざす事業への方向性も定着して有為な人材が続々と輩出されている。嬉しい限りだ。

原健三郎会長の本財団設立への情熱・英断と「先見の明」を称賛するとともに、口ぐせの「継続は力なり」を愚直に守り続けられることを切に期待している。



セル市長（米・セントメリーズ市）へ、マンسفールド駐日大使（昭60）の親善及び姉妹都市締結議決書を渡し、名誉市民章を授与される。

これを機に、セライナ市、バンワート市（いずれも米国）との2市が締結され、以後毎年、交流が盛んである。

チャンスを逃がすでないわ！

(兵庫県)
第17回(昭和62年度)団長 立木浩一

原先生と私の父が洲本中学校時代の同級生だった関係で昭和25年ごろから、20回連続当選のうち10回ほど我が家で選挙事務所を開設させていただいた。両親、特に母が殿様に仕える家臣のように献身的に寝食を忘れておもてなしに励んでいたのを思い出します。

原先生と両親のおかげで、なにも尽くしていない私が先生に大事にされ、どれほど良い思いをさせていただいたことか枚挙に暇がありません。原先生がお亡くなりになり、先生のことを話す両親ももういませんが、思い出の中によみがえります。

昭和62年勤労青少年海外派遣団の第17回の団長として参加するようお声を掛けていただきました。当初は16日間も店や家を空けることは到底無理と辞退しましたが、「行けるときには行っておくもんだ。チャンスを逃がす

でないわ！」との先生の一喝で参加することになりました。

その気になれば決まった途端わくわく。秋田県から熊本県までの若い仲間29名も初めてのアメリカ。オハイオ・セントメリーズでのホームステイをはじめ充実した感動的な毎日。想像していた以上に巨大で力強さを実感したアメリカ。若い時にあのアメリカを見ておけて良かったと思いつけています。そして何よりも良かったのは旅行から帰ってみると、私が留守にしている家や店が回っていくようになっていたことです。その後アメリカだけでも10回は行っております。

原先生から与えられた諸々の大きさに感謝するとともに、「何事にも感謝することにより幸せになれるのだ」と教えてくださった原健三郎先生に感謝します。



セル市長とセントメリーズ市長室にて

第3回勤労青少年フィランソロピー(社会貢献)体験米国派遣団に参加して

(千葉県)

第3回(平成8年度)団長 石谷美智子

(財)勤労青少年協会では、平成6年度から3年間にわたり、フィランソロピー(社会貢献)体験米国派遣事業を実施されました。当時、協会会長でおられた原健三郎先生は、若いころアメリカに留学され、当地の「ボランティア活動」「慈善事業」に深い思いを持たれて、日本の青少年にもこのことの教育、理解を深める機会をと本事業を用意されたのです。

“フィランソロピー”という語は、当時日本ではまだ馴染みの薄い言葉であったと思いますが、平成7年1月の阪神・淡路大震災時に、全国の、特に若い人たちの救援・支援活動が社会に強く印象付けられてボランティアへの意識や機運が急速に高まり、また、企業や団体でもこのことへの取組みが進められていました。

私たち、企業、労働組合、公共団体などに働く若者及び大学生の8人は、平成8年9月に第3回フィランソロピー体験派遣団員としてアメリカでの11日間の研修に参加しました。

本誌の「フィランソロピー体験米国派遣団の思い出など」を書かれている梅本洋一郎さんはこの時御一緒した1人です。

団員はホームステイでアメリカ市民の暮らしを体験し、ワシントン、ニューヨーク、サンフランシスコの企業、民間ケアセンター、

非営利団体などで社会貢献の実態を学び、また、施設入居者の介助、食堂の洗い物、ホームレスへの食事の配布などを通して、アメリカ社会に根付いている互いに支え合う精神の大きさに驚きました。



ヴァージニア ホームスティファミリーと共に



ワシントン ホームレスへの食事サービス風景

住民の自治意識が高く、社会貢献活動はよりよい社会形成のための市民の当然の義務との考えで小学校から授業に取り入れられ、だれもが何らかのボランティア活動に参加していること、そして企業においては地域に利益

を還元し地域と密着して共に歩まなければ事業運営は不可能であるという認識です。

大小60万もの社会貢献事業を行う非営利団体が存在し、拠出金、自社製品、人材、技術など多岐にわたる提供を募り、それを必要としているところへ配布する組織力、公平分配の情報公開、税法制の整備などを図ってきているのです。

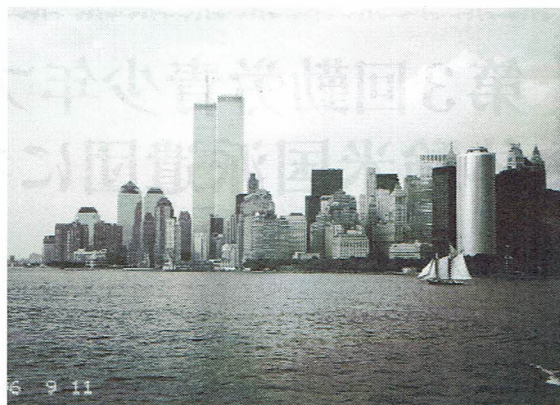
私たちメンバーは、多くを知る幸運をいただいたことに感謝し、帰国後は早速周りに伝え、出来ることから実行していこうと誓い合いました。

そして、この感動を継続すべく、その後数度、関西、東京などで当時を語る会を持ちました。

それにつけても、前出の梅本さんも書いていますが、私たちが訪問したニューヨークの世界貿易センター内の米国富士銀行が、日本人スタッフの方々が、多くの命が、2001年の9、11テロ事件でビルとともに消滅してしまったことが今でも現実とは思えません。心から御冥福をお祈りするばかりです。

日本では日本の実情に合った社会貢献事業が展開されていると思いますが、最近の多くのNPO法人の多様な活動は心強いことです。

私は、学んだことの実践はなかなか出来な
いでいますが、今はせめてもと自治会の高齢者相互見守りや自分の自立生活の維持に努め、フィリピンのストリート・チルドレンの里親になっています。



ニューヨーク マンハッタン遠景
後方にそびえるツインタワー世界貿易センタービルは、今はもう無い。



自由の女神像